

## コリント人への手紙第二 第12章 9節b

「私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」

強がって身を守り、強さで野望を果たそうとする姿勢が世の慣わしである。勝者は脚光を浴び、敗者は舞台から降りる。いかなる競争においても、よく見られる光景であり、特別なことではない。

ところが、ここでは弱さを誇りとする者がいる。そんなことでは世の中やっていけないよ、と笑われるのがおちである。実際負けまいとして励み、それでも敗者になってしまうことのほうが多い。望んでも、ほんの一握りの者しか勝者にはなれない現実がある。敗者には敗者の誇りがある、と言いつけ受け止めるのが関の山である。

ところが、弱さを誇るのである。勝者、敗者のことではない。弱さである。この弱さは勝者であろうが、敗者であろうが、どちらにも横たわる事実である。苦難に直面し、どうにもならない弱さがある。やがて、誰もが直面する弱さである。元々抱える、有限なる存在の事実だ。

弱さに直視する時、弱さを越えさせてくださるキリストに出会う。私の弱さでキリストが立つ。弱さを誇る。